

## 【vol.62】 ディミニッシュスケールの練習法について

どうも、大沼です。

今回は、これまで弾いてきた、

『4音構成のディミニッシュスケールの、具体的なトレーニングパターン』

をやっていきましょう。

今回の号は元々構想はあったんですが、  
最初は作らないつもりでいました。

なぜなら、この講座自体が、

『わからないことを自分自身の力で解決できる実力を身に付ける』

のが目的だからです。

なので、テキストでは基本的な部分の解説に留めておき、  
その後、出来るだけ自力で練習メニューなどを  
編み出して欲しいと思っています。

特に、今は講座自体が終盤ですし、これまでやってきたことや、  
手持ちの教本や雑誌などに載っている譜例などから、  
練習のヒントは沢山得られるでしょう。

そういったものの“活かし方”を考えられる様になる為に  
この講座があります。

とは言え、ディミニッシュスケールの様な、  
他のスケールに比べて普段使う機会が少ないものは  
少し練習しにくいかなとも思います。

なので参考程度に、僕が普段やっている練習譜例を  
いくつか紹介しておきます。

これらを参考に、今後出てくるであろう特殊スケールの  
練習法を考えるベースとしてもらえれば、と。

では、やっていきましょうか。

まず、単にスケールポジションを弾くだけなら、過去のテキストに載っているポジション図を参考にしてもらえれば大丈夫でしょう。

なので、今回紹介するのは、他のスケールからスムーズにディミニッシュに切り替えられる様になる為の練習譜例です。

ディミニッシュスケールを使う事になるのは、普通の楽曲であれば、どちらかというマイナーキーの曲が多くなるので、主にマイナーペンタからスムーズにディミニッシュに切り替える譜例を弾いてみます。

keyはいつもの様にAmで。わかりやすくいきましょう。

スケールとしては、AマイナーペンタからG#ディミニッシュスケールへの切り替えです。

フレーズとしては、この両者のポジションを行ったり来たりする、と言う事ですね。

この様な、

『ベースとなるスケールから、その近くにある別のスケールに切り替える』

という練習は、各コードトーンへの対応、転調先のスケールへの切り替え、ディミニッシュのような特殊なスケールへの切り替えなどにも使える、様々なスケーリングの考え方の基本です。

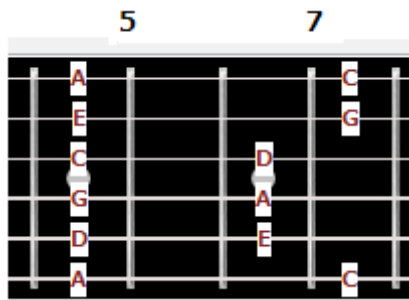
今回はディミニッシュへの切り替えですが、練習法として、「こんな感じでスケールを切り替えると、色々わかりやすいんだな〜」と、視覚的、聴覚的な感覚も掴んで下さい。

それが掴めれば、今後、様々なスケールチェンジのパターンに遭遇した時、対処のスピードが上がっていくのを実感出来るはずですよ。

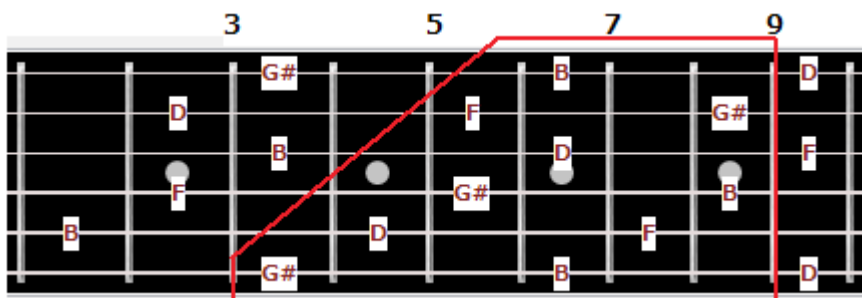
では、実際のフレーズです。

まずはAmペンタのこのポジションと、G#ディミニッシュのこのポジションを切り替えるフレーズです。

※Am ペンタ



※G#ディミニッシュ



練習譜例 1



G#ディミニッシュ

指使いは特に指定していませんが、ディミニッシュに切り替わる1弦7フレットを中指で弾き始めると、その後がスムーズに行けます。

このフレーズは、最後の6弦4フレット→5フレットを人差し指で弾けば延々ループする事が出来ます。

手がポジションに慣れるまで、メトロノームなどに合わせて一定時間弾き続けてみましょう。

次は同じポジションを使って、譜割を変えてのバリエーションです。

3音刻みの良くあるパターンですね。

## 練習譜例 2

The image shows a musical score for a guitar exercise. It consists of two systems. Each system has a treble clef staff with a melody of eighth notes and triplets, and a guitar TAB staff with fret numbers. The first system starts at measure 4 and ends at measure 6. The second system starts at measure 7 and ends at measure 9. The TAB staff uses numbers 5-8, 7, 8, 9, 6, 7, 5, 7, 5, 7, 5, 7, 5, 8, 5, 8, 5, 8, 7, 9, 6, 9, 6, 7, 6, 7, 9, 7, 9, 6, 9, 6, 8, 6, 8, 5, 8, 5, 7, 5, 7, 4, 5.

3連符のリズムに気をつけて弾いてみましょう。

この3音刻みのパターンだと、ディミニッシュのポジションを降りる時の指使いは、人によって弾きやすく感じるものが変わる可能性があります。

色々と試してみて、自分なりに弾きやすい指使いを重点的に練習しましょう。

次は、同じ Am ペンタのポジションから、こちらの G#ディミニッシュのポジションに切り替えてみます。

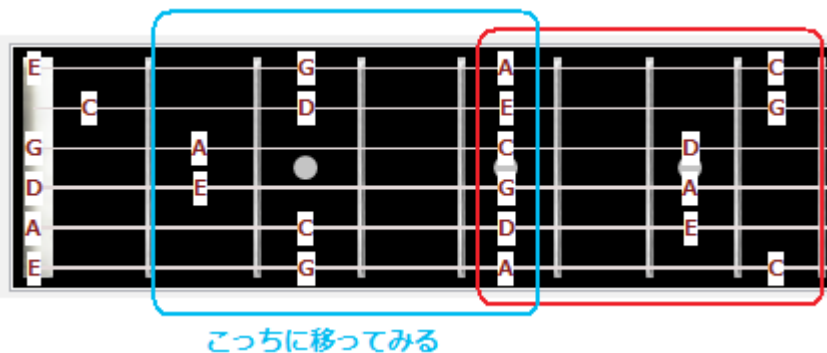
The diagram shows a fretboard with frets 3, 5, 7, and 9 labeled. The notes G#, B, D, F, G#, B, D, F are marked on the strings. A red box highlights the G# and B notes on the 3rd and 5th frets.

## 練習譜例 3

さて、このフレーズのディミニッシュの部分で、過去のテキストで覚えてきた指使いで弾くと、最後の6弦5フレットは薬指か小指で弾きたくなるはずです。

そうなった場合、最初のAmペンタのポジションに戻るには、人差し指を6弦5フレットに持ってくるために、左手をパッと右にずらさなくてははいけませんよね？

それはそれで良いんですが、“練習の発展”というモノを考えた場合、例えばAmペンタをこちらのポジションで弾いてみる、というのもアリですよ。



で、またこちらのポジションを上がり、G#ディミニッシュへ。

**練習譜例 4 (※練習譜例 3 と繋げてみてください)**

この様に、ポジションを左右に移ったりして、色々なパターンを試してみてください。

実際の所、スケール練習のパターンというのは、

『そのスケールを覚える時に習得効率の良い練習』

はありますが、実際にアドリブソロを弾く時やフレーズを作る時には、  
また少し違った観点から見直す必要があります。

その際、この様に色々なポジションにスラスラと切り替えられると、  
左手の自由度が格段に上がります。

トレーニングとしてきっちりこなす事も大事ですが、  
あまり難しく考えずに、気楽に色々な動きを試してみましょう。

そこから良い感じのフレーズが生まれる事もありますので。

では、最後にもう1つ。

これまでは、Amペンタを(音程的に)上がってから、ディミニッシュで下がる、  
というパターンでしたが、今度は逆に、Amペンタで下がってから  
ディミニッシュで上がる、というパターンです。

最初は、スケールを切り替える時、視覚的に少し迷うと思いますが、  
結局、これまでとやる事は一緒なので、繰り返し弾いている内に慣れるでしょう。

練習譜例 5

The image shows a musical score for a guitar exercise. It consists of a treble clef staff and a tablature staff. The treble staff has a key signature of one sharp (F#) and a time signature of 4/4. The tablature staff has fret numbers 8, 5, 8, 5, 7, 5, 7, 5, 7, 5, 8, 5, 4, 7, 5, 8, 6, 9, 7, 8. A red box highlights the section from measure 14 to measure 15, which contains the notes G#4, A4, B4, C5, D5, E5, F#5, G5. Below the tablature staff, the text 'G#ディミニッシュ' is written in red.

こちらのパターンも、色々なポジションで弾いてみましょう。

では、今回は以上になります。

譜例としては、6弦ルートポジションしか載せていませんが、  
同じ考え方で5弦ルートの練習パターンを考えて弾いてみてください。

最初の方でも少しお話ししましたが、今回の様な、

**今、基準としているスケールポジションから、  
近くにある、別のスケールポジションに切り替える。**

という考え方は非常に重要なポイントになってきます。

以前やった、

Amスケール⇔Aハーモニックマイナースケールの切り替えだったり、

部分転調的なコード進行の、向かう先のコードのコードトーンを狙ったり、

単純にチャーチモード7種のポジションを左右に動いたり、と

様々な機会使います。

スケールを切り替える時に重要になってくる考え方として、

**今弾いている音の、半音となりか全音となりに、  
向かう先のコード(≠切り替えるべきスケール)に対応している音はないか？**

というモノがあります。

これは、今はまだ、重要性をあまり実感できないかもしれませんが、  
フレージングの基本であり、究極系なので、  
なんとなーくで良いので覚えておいてください。

過去のテキストでも、“次のコードやスケールに半音で接するフレーズ”を  
載せていると思いますので、改めてそういった観点から弾いてみると  
色々気が付く事があるかと思います。

それでは、また次回。

ありがとうございました。

大沼